新　“ネギまと転生者”

大喰らいの牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新　“ネギまと転生者”

【Ｎコード】
Ｎ７２６４Ｙ

【作者名】
大喰らいの牙

【あらすじ】
これは、以前『ネギまと転生者』を新しくして、一からやり直したものです。
物語は原作開始の約１０００年程前から始まります。
アンチになるかどうかは書いていかないと分からないですが、原作ブレイクにはなります。

始まり（前書き）

これは以前上げた“ネギまと転生者”を一新にした作品です。

物語の始めは原作開始から約１０００年前からの始まり、つまり、魔法大戦前からのお話です。

主人公は変わらずの“蒼騎　真紅狼”ですが、生い立ちや能力を多少変更しております。

始まり

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「これ！　起きろ！！」
「おぅ！？」

頭を杖で叩かれた………　硬い所に当たって凄い痛い。

「ここは――――どこだ？」
「……神様が居るところじゃ」
「へぇ～～　………神？！」
「ようやく状況に追い付いてきたか………」
「えっとじゃあ、アンタは神様なのか？」
「そうじゃぞ」
「で、ちょっとばっかし記憶が吹っ飛んでいるんだが、俺はなんでココに居るんだ？」
「………お主の体の中に存在してるモノが危険だったため、超法規的措置によりお主を殺したんじゃ」
「……マジで？」
「まじでまじで」

いきなり言われてもそれは困るな。
いや、マジで。
取り敢えず、前向きに生きるか。

「で、殺した理由は分かった。その他に用があるんだろ？」
「うむ。神様の中にもルールがあってな。お主の場合特別だったんじゃが、基本神様って言うのは、人間界に触れないようにしてるんじゃ。だが、儂より下の下級神様……所謂、『見習い』がたまーに“うっかり”人を殺してしまう時があるのじゃ。そうなってしまった時に、その者達を転生させるんだが、何故かマンガの世界に転生させるのが流行っておってな、その世界に生きる為にチートになって転生させているのだ」

ふーん？　神様業界ってのも大変なんだな。
一つ気になっていたので聞いてみた。

「神（ジイサン）、アンタさっき“儂より下”って言ってたけど……位高いの？」
「儂はこれでも最高神じゃ。といっても、本当に人間界には触れておらんぞ？　お主のような例外以外とかはな。本来はそういう部署があるのでそちらに一任しておるのじゃ」
「色々あるもんだ。……ん？　ということは俺もマンガの世界に転生するってことか？」
「まぁ、そうじゃな」

転生か……　人生なにがあるか分からないものだな。

「一応聞くけど、行き先は？」
「今だと……『ネギま！』という世界らしい。まぁ、ファンタジ

ーじゃな」
「ファンタジーってことは“魔法”とか？」
「その解釈で間違ってないな。まぁ、餞別代りにそれなりの特典付けてやるぞ？　しかし、お主は何故か、その『ネギま！』の魔法が使えないらしい」
「何故に？」
「そういう体質らしいの……」
「そっかー、体質ならしかたがないよねーー」
「「ＨＡＨＡＨＡ！！（　　。∀　。）」」

「気にしろよ！！」とか言われそうだけど、無視しよう。
深く関わっちゃいけない気がする。

「んじゃあ、ＦＦ５と６（アドバンス）の魔法と青魔法、暗黒魔法が使えて、さらには召喚獣は６ので。あとはＫＯＦのオズワルドの“カーネフェル”だろ、鋼殻のレギオスの“鋼糸”の技と剄技を全部で“剄”の量はアルシェイラと同じぐらいで。あとは戦国ＢＡＳＡＲＡ２の“前田　慶次”、“長曾我部　元親”、“織田　信長”の最終武器で、ただし、慶次の武器だけ“第七武器”も付けてくれ。ん～、アレを使ってみたかったんだよね。Ｄ．Ｇｒａｙ－ｍａｎのクロス・マリアンの“断罪者（ジャッジメント）”を。最後に、メルブラの“蒼崎　青子”のマジックガンナーと“軋摩紅摩”の灼熱をでいいッス」
「随分とまた付けたな。まぁいいだろう。そうしておこう。そうじゃ、こちらの特典みたいなものなんじゃが……“直死の魔眼”と『七夜』の体術、そして不老不死が付いておる」
「なんでまた？」
「こうしないとお主の体が耐えられないらしい。お主の体の中の存在が原因らしい」

「ふ〜〜ん？　まぁ、貰えるモノは貰っておくよ。あとさ、ちょっとした改造をしてもらってもいい？」
「内容によるが、言ってみろ」
「いや、“蒼崎　青子”のマジックガンナーでＦＦの魔法も撃てるようにすることと“断罪者（ジャッジメント）”の弾丸もＦＦの魔法を込めた“魔法弾”を追加して欲しいのと、俺用の色に変えて、“断罪者（ジャッジメント）”から別の名に変えることなんだけど……」
「まぁ、いいだろう。そう手配しておくぞ。ああ、注意点だ」
「んーー？」
「不老不死じゃが、体に馴染むまでは一年ちょっとかかるから、その間気を付けることじゃ」
「分かった。んじゃ、世話になったな神（ジイサン）」
「飛ばされる時間軸は、約１０００年程前からじゃから、貰った能力の研鑽にでもあてるのじゃな」
「うぃ」

そう返事すると、次第に足元から薄くなっていった。
そうして、俺は意識を失った。

「さらばじゃ――――――――蒼騎　真紅狼よ」

始まり（後書き）

新しくなって、やり直しました！

以前“ネギまと転生者”を読んでくれていた皆さまがまた付き合って頂けたら嬉しい限りです！！

次回はキャラ設定です。

キャラ設定

キャラ設定

主人公　蒼騎　真紅狼　《あおき　しんくろう》

年　今現在　２０歳

身長　１７５ｃｍ　↓　１８０ｃｍ

体重　６１ｋｇ　↓　６５ｋｇ

誕生日　４月２９日

容姿は鋼殻のレギオスのリンテンスをイメージ。だが、無精髭は無いし、煙草も吸わない。ただ、眼の色は真紅。

裏設定

両親は二人とも他界している。１０歳の時に交通事故により死亡。その後、１０年間一人で切り盛りしながら、暮らしているが２０歳の時、神（ジイサン）に超法規的措置により殺されて、能力をもらい転生する。

能力
能力は基本的に“ネギまと転生者”と一緒ですが、ちょっとばかり能力の入れ替えをしました。

昔は――――

ＢＬＡＺＢＬＵＥ　ＣＳのハザマの能力、“碧の魔導書”を保有。
武器　二本のバタフライナイフ　ドライブは『ウロボロス』

ＫＯＦのオズワルドの戦闘術　“カーネフェル”を使える。
武器　トランプ

鋼殻のレギオスの天剣受授者の技全てを使える。（その他の剄技も使用可能）
武器　リンテンスの鋼糸と刀の天剣

戦国ＢＡＳＡＲＡ２の武将の武具と衣装に各武将の技が使える。
各武将によって、「吸収・半減・無効・弱点」できる属性がある。

ＦＦ５の暗黒魔法と６の魔法、青魔法＋召喚獣が使える。

『七夜』の体術と“直死の魔眼”が使える。

『紅』の“崩月流”と角あり。
そして、不老不死。

でしたが、“新　ネギまと転生者”ではこうです。

ＫＯＦのオズワルドの戦闘術　“カーネフェル”を使える。
武器　トランプ

鋼殻のレギオスの天剣受授者の技全てを使える。（その他の剄技も使用可能）
武器　リンテンスの鋼糸と刀の天剣

ＦＦ５の暗黒魔法と６の魔法、青魔法＋召喚獣が使える。

戦国ＢＡＳＡＲＡ２の武将の武具と衣装に各武将の技が使える。
各武将によって、「吸収・半減・無効・弱点」できる属性がある。

前田慶次
吸収　風　　半減　地　　無効　雷　　弱点　炎

長曾我部元親
吸収　炎　半減　雷　無効　水　弱点　地

織田信長
吸収　闇　半減　炎　無効　地　弱点　光

不老不死。
までは一緒です。

ここからが新しい部分です。

メルブラ
“蒼崎　青子”の通称『マジックガンナー』の能力が使える。
破壊特化

“軋間　紅摩”の灼熱
鬼の肉体

D．Ｇｒａｙ－ｍａｎ
クロス・マリアンの主武器である“断罪者（ジャッジメント）”
ちなみに“断罪者（ジャッジメント）”は真紅狼ｖｅｒに変えます。
以上です。

減ったのは、“ハザマ”の能力と、ＢＡＳＡＲＡ２の“伊達　政宗”と“真田　幸村”の武器と技、そして『紅』の“崩月流”です。

結構“魔術”よりにしてみました。

最後にアンケートなんですが……

“断罪者（ジャッジメント）”真紅狼ｖｅｒについて、なにか良い名前はありませんか？

あと、配色やどんなモデルなどもなんですが……

原作のクロスの“断罪者（ジャッジメント）”は銃身に十字架のデザインがありましたが、真紅狼はどのようなデザインがいいですか？

ご意見お待ちしております。

キャラ設定（後書き）

出来たら、今日中にもう一話上げたいです。

そして、アンケートの方よろしくお願いします！！

意外なお友達・・・

～真紅狼ｓｉｄｅ～

目が覚めたら、大森林の中に居た。

いや、冗談無くマジで。

取り敢えず、体が自由に動くかどうか確かめてみたら、ちゃんと動いた。……というより、以前よりも軽やかに動く。

不意にポケットの中に何か紙らしきものが入っていたので取り出してみるとこう書かれていた。

『真紅狼へ

お主が目を覚めた時にはこれを読んでいるだろう。お主が居る場所は“魔法世界”と呼ばれる場所で地球ではない。そこは本来の火星の表面に“上乗り”させた状態の“魔法世界”じゃ。地球に行きたかったら、その世界にある“ゲート”を使えば、行ける様になっておる……覚えといてくれ。最後にこれを消しといてくれ。

神より』

ここは火星なのか～～。

初めてだ、転生していきなり地球以外の星に降り立つなんて……

取り敢えず、メモは消去っと。

『ファイア』

ボッ！

指先から小さな炎が出て、メモを燃やした。

「さて、体が不老不死になるまで貰った能力の把握と力を馴染さねぇとな……」

そこから、俺は長い年月を掛けて、力を体に馴染ませた。

キングクリムゾン！！
軽く２０１年はすっ飛ばす！！

はい、真紅狼だ。
今、年は２２１歳だ。
最初の一年は大人しく隠れ住んでいたよ。
大森林の奥にそれなりの城が在ってな、そこを拠点にしてた。
周りは自然が創った石壁とかだったから、人はまず来れないし、猛獣が来ようとしても他の強者がうろついてるから、そちらも問題は無かった。
その後、体が不老不死になって、力も馴染んだ後、周りに居る猛獣共と殴り合いしてた。
いや、凄いんだよ。
人じゃないのに魔法障壁張っててさ。
魔獣パネェ……

で、殴り合った後何故か仲良くなった。
意志疎通がそれなりに出来るようになって、まぁ、楽しく過ごしていたよ。
今日はこの森に住んでいる猛獣（友人）たちを集めた。

「話があってな。ちょっと世界を見て回ってくるから、その間留守を頼みたいんだよ」

まぁ、コイツ等に言っても人語で返事が返ってくる筈ないのだが、そこは長年住んでいる者達のコミュニケーションで返事が返って来た。

「「「「「ゴォアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」」」」」

どうやら、良い返事だったらしい。

「じゃあ、行ってくるから……後を頼むぜ？」

森を出ようと外に向かおうとしたら、一匹の若い竜が首を垂らして、「乗れ」と言っているみたいだったのでそいつに乗って森を出た。

「態々、見送り有難うな」
「……グルルゥ」

「おう。またな」

ブァア！

俺を乗せた若い竜は数少ないやり取りをしたあと、再び森の中に去っていった。

そこから、街のある方に歩き始めた。
情報を収集しながら、街の名前などを覚えたりした。
どうやら、俺が居た森は、エリジウム大陸の“ケルベラス大森林”と呼ばれる場所だったらしい。
その他にも、自由交易都市“グラニクス”や魔法学術都市“アリアドネー”、共和国“メガロメセンブリナ”それに対立する大帝国“ヘラス”、そして、この世界が出来た当時に創られた王国“オスティア”などがあるらしい。

そして今現在、俺はその“オスティア”に居るんだが、浮いてるんだ土地が。
浮遊国かよ、ここ。
とまぁ、歩いていたら何かダンジョンっぽいところに来てしまったんだが、何ココ？
取り敢えず、俺を後ろから見ている黒いフードを被ってる人に聞こう。

「なぁ、アンタ。ここがどこか分かるか？」

「！？」

そう問いかけると姿を現した。
……結構出来そうだなぁ。

「貴様、何者だ？」

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～？？？ｓｉｄｅ～
私はいつも、ここから望遠鏡を使って墓守りの宮殿を覗いていた時、人の気配がしたのでフードを被り、気配を消して近づくと妙な感じがした。
この世界の者でもなく、ましてや「人間」でも無い存在だった。
そこに不意に声を掛けられた――――

「なぁ、アンタ。ここがどこか分かるか？」
「！？」

気配はちゃんと消していた筈なのに、いつどこで分かったのか？
と自問自答していたが、答えることにした。

「貴様、何者だ？」

「あらら、俺は“場所”を聞いてるのに、そちらは“名前”を訪ねるのかい？」
「もう一度、聞く。貴様、何者だ？」
「人の名を聞きたいなら、自分から名乗れ。それが出来ないなら、俺はお前を無視するし、答える気も無い。邪魔したな……」

そういうと彼は去っていこうとしたので、私は必死に引きとめた。

「待って！　待ってください～～～！！　名乗りますから、行かないでください～～！！　私の話し相手になってください～～！！」

彼の腰にしがみつきながら、必死に引きとめた。
そうすると彼は突然のブレイクに驚きながらも、止まってくれた。
よかった～～。

「……えーっと、名前は？」
「えっと、レーネ・アルカディアと言います。“造物主（ライフメーカー）”とも呼ばれています。貴方のお名前はなんて言うんですか？」
「蒼騎　真紅狼だ」
「蒼騎　真紅狼さんですか……、“旧世界”の方ですか？」
「“旧世界”？」
「えっとですね。こちらの世界を“新世界”といい、“ゲート”の向こう側を“旧世界”と言うんです」
「じゃあ、一応旧世界出身だな」

何か含みのある言い方ですが、触らない方がいいですね。

「それでですね。初対面の方にこんなこというのもどうかと思うんですが、私と友人になってくれませんか！？」
「別にいいぞ？」
「いいんですか！？」
「うん、まあ。何か困ることでもあるのか？」
「いや、だって、皆、私の正体を言うと逃げたり、怯えたりするので……」
「俺はそんなの知らんし、関係無いね。う～～ん、呼び名は“レーネ”でいいか？　ちょっと安直過ぎるが……」
「じゃあ、私は“真紅狼”って呼びますね！」
「おう。よろしくな、レーネ」
「はい。よろしくです。真紅狼」
「で、レーネ、頼みがあるんだがいいか？」
「なんですか、真紅狼？」
「俺、“旧世界”に行きたいんだが、“ゲート”を開いてくれないか？」
「え？　う～～ん、まあ、良いですよ」

そういって、真紅狼をゲートまで案内してゲートを開いた。

「また、逢おう、レーネ」

そう言って、真紅狼は消えた。

「はい。また、いつか……」

～レーネside out～

とまぁ、ゲートで移動したんだが目覚めたら、多分日本（？）の土地の関東に居たんだよ。

意外なお友達・・・（後書き）

はい、いきなりキャラブレイクです。

造物主はフードを被ると威厳が出ますが、脱ぐと普通に少女です。
あと、レーネにはもう一人の人格者がいますが、それがライフメーカーです。
つまり、レーネの体を借りることで現界出来るわけです。
条件は『フードを被ること』です
そして、この当時はまだ、セクトゥム達は居ません。
創られておりません。

キャラブレイクに「ええ～～～～！！」という方も居るかもしれませんが、それが狙いだったり（笑）

話の進みが早いと感じてしまいますが、魔法大戦時に長ーくやりそうなので、パパッと進めます。

また、キャラの構成が出来ましたら、載せます。

お次は、あの人が登場。

真紅狼と吸血姫（前書き）

連日投稿だーー！！

真紅狼と吸血姫

～真紅狼ｓｉｄｅ～

どうやら、ここは“麻帆良”という土地らしい。

調べてみると、それなりに霊脈やら魔力のパイプラインがあるので、この土地を丸ごと俺が買い取った。

というより、そこを治めている領主に頼んだら、すんなり土地を分けてもらった。

「貰うの無理じゃね？」とか思う人が居るかもしれないが、いやね？　転移した後、人が襲われていたから助けたら、ここの領主の娘さんだったらしく、その後家まで、送ってあげたんだよ。そしたら「お礼がしたい」っていうから、「じゃあ、土地をくれ」って言ったら、「どうぞ、好きなだけ貰ってください！！」と言ったから、「“麻帆良”という土地を全部くれ」って二言返事で分けてもらったのさ！！

と言うわけで、今、俺は家を建てている。

かなり奥の方に創った。

武家屋敷だが、火事や自然災害などになっても崩れない特殊な造りにしてあるので大丈夫だ。ついでに奥行きがある家にしてみた。

門までしっかりとした物を造ってある。

門をくぐると大きな屋敷が見えるんだが、そこは客人用みたいなもので、母屋はさらに奥に造った。

あまり、人目につかないようなに場所に造ってある。

なんせ“魔法”とか使うしね。

その後、俺の所有している土地全体を封印した。

これから世界を見て回るし、勝手に入られても困る。

俺の土地に入ろうと近づくと、急に違う事を思い出したように遠ざかっていくような精神干渉のような結界を張った。
ただ、これは俺が許可した人達はすんなりと入れる。
まぁ、今のところ一人もいないけどね！

「さて、欧州辺りに行ってみるか……」

俺は召喚獣を呼び出した。
呼んだのは“ジャンプ”でおなじみの『ケーツハリー』
俺はすぐさまケーツハリーに乗り、欧州に行ってみると……冬でした。

「雪が降ってる……　まぁ、冬なら当然か」

ケーツハリーに茂みが多い所に行ってもらい、そこで降りた。
そこから、俺の世界と同じの“欧州”なのか歩き回った。
だいたい、約２０４年ぐらいの月日をかけたよ……
ということで今俺は４４５歳だ。
見て回った結果は、全く同じだった。
冬の時期にドイツに行って麦酒を飲んだんだが、うめー、麦酒マジうめー。
つーか、この時代ってまだ城とかあった時代なんだよなぁ。

で、もう夜です。

最悪野宿になるかなぁーと思っていたら、無人の小屋があったからそこに今夜は泊まることにした。
ちかくに湖があったから、そこで魚と水を採って、森からは竹を探した。
二、三本を持って帰り、即席の皿と箸、コップを造った。
火をおこし、魚を焼いて、真水を煮沸させた後、食事をした。
その時、近くで「ガサッ！」という物音がしたので、そこに行ってみると裸足で走って来たと思われる小さな女の子がいた。

「えーっと、どうしたんだ？」
「・・・・・・・・・・・・」

困った。じーっとこちらを見てくるだけで、喋ってくれないのは困る。
その時、その女の子の腹から「ぐ～～」という音が聞こえたので……

「……食べるか？」
「・・・・・（コクン」
「よし、ちょっと待ってろ」

魚を調達しに行き、その場で内臓を取り出して綺麗に洗い、じっくり焼いた後その子に渡して上げた。

「アツいから、気をつけて食べるんだ。あと骨にも気をつけてな」

「・・・・・・ありがとう」
「いいえ、どういたしまして」

よほど腹が減っていたのか、三匹採って来た魚の内、二匹を食べてしまっていた。
そして、腹が満たされた後、女の子はこちらを見て口を開いた。

「食べさせて有難うございます。私はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェルと言います。そして……」
「俺の名は蒼騎　真紅狼だ。言いたくなかったら言わなくてもいいぞ？」
「……そして、私は吸血姫です」

いやはや、コイツは参ったね。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～エヴァｓｉｄｅ～
明日は私の誕生日で、城の中に居るメイド達は明日の為の準備に忙しかった。
明日の誕生日を楽しみながら、ベッドに入り寝ていたら、急に体が熱くなったのを感じたので起きてみると、私の部屋に変な男が居て、なにやら歓喜していた。

「やった！　俺は実験は成功だ！！」
「ねぇ、私の体に何をしたの！？」

「キミはねぇ、もう人間じゃないんだよ！　人の血を啜り、永遠を生きる“吸血姫”になったのさ！！」
「……え？」

私は“人”じゃない？
地面をみてみると、先程まで生きていた筈の父と母が首から血を流し、息絶えていた。
私は自分が何をしたのか、分からなかったが、この男を殺してやりたいという気持ちはあった。
男は背を向けながら歓喜していた……
地面にあったナイフをそっと持ち上げて、その男の背中を刺した。

「……！？　がぁ！！」

男は倒れた後、私は城を出て、ただ、ひたすら走った。
その時、森の中から煙が上がっていたので、そこに向かってみると、一人の若い（？）男が焼き魚を食べていた。
こっそりと移動しようとしたが、その時に不意に物音を出してしまい、その男が近づいて来た後、お腹から「ぐ〜〜」という音を出してしまった。
そしたら、男の人が新しく魚を採ってきて、焼いて私に渡してくれた。

「アツいから、気をつけて食べるんだ。あと骨にも気をつけてな」
「・・・・・・ありがとう」
「いいえ、どういたしまして」

この人は見知らぬ相手なのに、ここまで優しいのが分からなかったが、今は食べることに集中した。
お腹がいっぱいになったので名乗ることにした。

「食べさせて有難うございます。私はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェルと言います。そして……」
「俺の名は蒼騎　真紅狼だ。言いたくなかったら言わなくてもいいぞ？」
「……そして、私は吸血姫です」

あの男が言っていたことを言ってみた。
私も“吸血姫”がなんなのか位は本で知っていた。
死ぬこと無く、人の生き血を啜る、化物
「この人もどうせ、私を恐れるんだろう」と思っていたんだが、反応は違った。

「へぇ～～、この時代にも吸血姫っているんだ」
「……へ？」
「ん？　どうしたんだ？」
「え、えと、私、吸血姫ですよ？　人間じゃないんですよ？　怖くないんですか！？」
「いや、俺の方が結構化物だと思うぞ？」
「……はい？」
「俺、不老不死だし。鬼だしなぁ」
「えと、失礼ですけど何歳ですか？」

「今年で４４５歳」
「……ポカーン（゜д゜）」

私は年齢を聞いて唖然としてしまった。
４……４４５歳、凄い年だ。

「まぁ、俺の年はどうでもいいとして、エヴァはどうしたいんだ？」
「え？」
「吸血姫なんだろ？　一箇所に留まることは出来ないし、バレたら人間達に何されるか分からない。……どうする？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

真紅狼さんの提示は私の未来を示していた。

「それに吸血姫とバレたら、エヴァを討伐するという輩も出てくるだろう」
「……真紅狼さんについていきます」
「俺についてくるのか？」
「はい。真紅狼さんと一緒に居たいんです。……ダメですか？」

返答が不安でしょうがないが本音をぶつけてみた。

「それなりにキツイことになるが、それでもか？」
「はい」

「分かった。よろしくな、エヴァ。あと俺の事は、真紅狼と呼び捨てでいいぞ」
「ありがとう！　真紅狼！！　あ、あとね、恥ずかしいんだけど……」
「どうした、改まって？」
「周りに人が居ないときや二人っきりの時は私の事を、“エヴァ”じゃなくて“キティ”って呼んで欲しいの／／／／」
「ん、分かった、キティ。……これでいいか？」
「うん／／／」
「そろそろ、寝るか。寒いから、俺のコートを着て寝な。キティ」
「真紅狼が風邪ひくから、一緒に寝よ」
「別に俺はいいんだが……」
「……お願い、一緒に寝て」
「……「バサッ」」

真紅狼は、手招きしたので私はその中に入り、二人で一緒に寝た。

暖かい。

～エヴァｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

さて、キティに生き残る術でも教え込まないとなぁ。

真紅狼と吸血姫（後書き）

ということでエヴァが仲間と言うより、家族になりました（？）
まだ、真紅狼にとってはエヴァの事を“恋人”とかじゃなくて、“妹”みたいな存在としてみてますので、ご注意を。

つーか、エヴァのキャラブレイクしてるような気がする。

次回は、初戦闘だーー！！
人がいっぱい死にます。

真夜中の戦闘

～真紅狼ｓｉｄｅ～

キティと旅を共にしてからは、魔法を覚えるようにさせた。
俺はこの世界の“魔法”が使えないけど、ＦＦの魔法は使えるのでそちらを覚えてもらった。
覚えてもらったんだが、キティの要領の良さが凄まじく泣きそうだ。
もうすでに、『フレア』まで覚えているんだぜ？
マジで、あり得ねぇって。
……これは、『暗黒魔法』を覚えさせてもいいんじゃないかな。
相性よさそうだし。

「あ、真紅狼！　私、『アルテマ』まで撃つ事が出来るようになったよ！！」
「もうそこまでいったのか……」
「ねぇ、真紅狼……“いつもの”やって？」
「ん？　ああ、ほい（ナデナデ）」
「～～～～～～～～～♪」

“いつもの”とは昔、魔法が撃てるようになったときに頭を撫でてやったのが、気にいったらしく、それ以降出来る度にやってあげている。
でも、撫でてあげた後のキティの笑顔が可愛いからこっちも好きでやってんだけどね。

「キティ」

「なに、真紅狼？」
「……『暗黒魔法』に興味はないか？」
「『暗黒……魔法』？」
「簡単に言えば、闇の眷属が使えるような魔法の一つだ」
「ということは、基本属性は“闇”なの？」
「そうだ。あとは魔法によって変わるな」
「私、覚えてみたい！」
「じゃあ、教えよう。でも、今日はここまでにして、もう寝ようか」
「うん。いっぱい覚えて、いっぱい動いたから疲れたよ」

宿……というより、無人の小屋があったのでそこに泊ることにした。
その後ろにある岩の隙間からお湯が出ていたので、砕いて掘ったらお湯が出て来たんだ。
だから、温泉を創ってあげた。

――――風呂シーンは各々、“心の眼”で見てくれ。

風呂に入った後、キティはすぐさま寝てしまったので毛布を掛けてあげた。
羊の毛で作られた毛布を何枚か、近くの村で譲ってもらった。
その後、そっと抜け出した。
小屋の周りには、『マディン』と『カブトレパス』を召喚して、護らせた。

「さて、そこに居る集団はなんか用かな？」

小屋から離れた丘でたった俺は、下で首に十字架を下げている集団に言い放った。

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～聖騎士ｓｉｄｅ～

私達は今、ある少女を追っていた。

その少女はなんでも“吸血姫”らしく、男を従えているらしい。

そこで教会は私に討伐任務を与えた。

部下や武装神父など総勢５０名を連れて、出発した。

そして、その二人組を見たという目撃情報を聞いて、小屋の近く来た時、丘の上から若い男が出てきた。

「さて、そこに居る集団はなんか用かな？」

「私達は、教会から派遣された聖騎士と武装神父です！　その先に居る少女を渡して頂きたい！！」

「……理由を聞きたい」

「理由は、少女が“吸血姫”だからです！！　あなたも救われます！！」

「“救われる”か……」

「そうです！　神は貴方をきっと許してくださる！　だから、さぁ！！」

「……くく、ハハハ、アハハハハハハ！！！」

「なにがおかしいんですか？！」

「お前、まさか俺が少女に操られていると思ったか？　バカじゃねぇの？　悪いが断らせてもらうぜ」

「くっ……、なら仕方がない。貴方には死んでもらいます」
「……やってみろ」
「行くぞ！！　…「ブシャアアアアアアア！！」……え？」

気が付いたら、半分の武装神父と部下たちが首を吹き飛ばされて死んでいた。

「え？　へ？　えぇ？？」

私は状況に追い付くことが出来なかった。
その間にさらに5人の首が吹き飛んで、血が吹き出ていた。
男は動いていないのに、次々と部下たちが死んでいった。
気が付くと既に私一人だけになっており、鎧は部下の血で汚れ、血の海が出来ていた。
そして、彼は丘から下りてこっちにゆっくり近づいてきた。

「くそがあああああああ！！！」

私はやぶれかぶれになりながら、剣を振るったが、いとも簡単に避けられて、首を掴まれ……　炎が私の体を焼いた。
～聖騎士ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
「吸血姫（キティ）を渡せ」と言ってきたので断ったら、思い通りに挑んでき

た。
自分たちの思い通りにならない輩は斬るってか？
どこの辻斬りだ、お前らは。
リーダーらしき男が剣を掲げて、突っ込んできそうだったのですぐさま“鋼糸”を展開して、後ろの部下と武装神父の首に巻きつけておいた。
そして、一歩踏み出した瞬間、首を飛ばしてやった。

首からは血が噴水のように飛び出ていた。
男は「何があったのか分からない」っていう顔をしていた。
いかんなぁ、戦場でそんな隙を見せていたら、「殺してください」って言ってるようなものだぞ？
そして、さらに5人の首を吹き飛ばした。
５０人居た、教会の派遣部隊も、数分でたった一人になってしまった。
俺は鋼糸をしまい、ゆっくりと男の元に歩いた。
男は叫びながら、剣を振り降ろしたが、簡単に避けられるモノだった。
避けた後、接近していたのでアレをやった。

「閻浮……提　厭　浄！！！！」

首を掴み、地上から炎が噴き上がり、その男を燃やしつくした。

「がぁあああああああああ！？」

男は悲鳴を上げながら、草原に転がっていった。

「オイ、逃げるなよ。お前にはまだ役目があるんだよ」
「や……役……目だと……？」
「そ、役目。『俺達を追ったらこうなりますよ』っていう体を張った警告をやってもらわないとね」

そういうと必死に逃げだそうとしていたが、俺は容赦なくある魔法を放った。

『メルトダウン』！！

ボォアアアアアアアアアアアア！！！

「ギャアアアアアああああAAAAAA！！！」

黒炎が辺り一帯を燃やしつくし、あの男の体の一部の肉体が溶けていた。
しばらく燃え続け、鎮火した後には男だった者の片腕が残ったり、武装神父や部下たちの死体が残しておいた。

「俺も寝よ」

その後、そうっと帰り、キティに寄り添って寝た。

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

俺はあの後、『紅蓮の殲滅鬼』と言われるようになった。

真夜中の戦闘（後書き）

α様、感想有難うございます。

ご意見にもあったんですが、“造物主”については、ちょっとしたオリジナル設定になりますのでご注意してください。

次回は“断罪者”真紅狼ｖｅｒが出ます。

考えていただいた、裂きやん様、ケルベルス様、読むのはいいけど様、ご意見有難うございました！！

再び『魔法世界』へ・・・

～エヴァｓｉｄｅ～
どうも、こんにちわ、エヴァンジェリンです。
真紅狼と旅を続けてから、もう5年が経とうとしてます。
最初は“吸血姫”の特徴が嫌という程出てきました。
定期的に“血”を吸わないといけなかったのを真紅狼が受け持ってくれた時は最初は嫌だったけど、真紅狼が「吸わないで、キティが発狂する方がもっと嫌だ」と言ってきたので甘えることにしました。
それから一年が経つと吸わなくても過ごしていけるようになり、だいぶこの体にも慣れてきました。
あとは、真紅狼の秘密も知りました。
真紅狼は元々“転生者”みたいだったらしく、別の世界で暮らしていたところを神様に殺されたらしいんだって。
「それなりの“理由”があったらしく、しょうがなかった」っていう風に言ってた。
さらに、ここ最近は教会の人達の追撃がなく、自由な暮らしが出来てます。
今は、真紅狼の家に向かってます。
なんでも、極東にあるそうです。

「まぁ、ここだな」
「この土地全部が真紅狼のなの？！」
「貰ったんだがな……」
「お家、大きいね！！」

真紅狼の家はとても大きかった。

目の前に見える、お屋敷が客用だと知った時は、空いた口が塞がらなかった。
そして、しばらくの間だいたい３００年ぐらいそこに住み、その間私もだいぶ強くなった。

３００年後・・・・

真紅狼に教わった『暗黒魔法』も全て覚えたし、魔法は一部の魔法のみ全部覚えた。
ん？　口調が変わってる？
３００年も経てば、変わるものだ。
最近、真紅狼が「『魔法世界（ムンドゥス・マギクス）』に行こうかねぇ……」と呟いていた。
『魔法世界（ムンドゥス・マギクス）』か……、話では何度か聞いていたが、どんなものか興味はあるな。
そうだ、聞いてくれ。私は真紅狼に教えてもらった『暗黒魔法』を“兵装（ティオーネ）”として、取り込んで戦う術式……『闇の魔法（マギア・エレベア）』を創ったぞ。
真紅狼にも使って欲しかったが、まぁ、『使えない』ので諦めた。

「真紅狼」
「なんだ、キティ？」
「あまりその名で呼ばないで欲しいんだが、まぁいいか。話はいきなり変わるんだがいいか？」
「おう」
「『魔法世界（ムンドゥス・マギクス）』に行ってみたいんだが……」
「『魔法世界（ムンドゥス・マギクス）』に？」

「そうだ」
「奇遇だな、俺も行こうか迷っていたんだが、キティが行きたいなら行くしかないな。ということで準備しろ」
「分かった」

そうして、私達は『魔法世界（ムンドゥス・マギクス）』に行くこととなった。
～エヴァｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
キティが「『魔法世界（ムンドゥス・マギクス）』に行きたい」と言ってきたので、行く準備をした。

「準備はいいか？」
「ああ、いいぞ」
「さてと、来い！　『ケーツハリー』！！」

ケーツハリーを呼び出し、飛び乗った。
そして、飛び乗る前に例の如く、封印を張り直しておいた。
今回はグレートブリテンから行く方法にした。
麻帆等からでも“ゲート”はあるんだが、アレはあちら側から開いたので行けたがこちらからではまだ無理だ。
そして、向かう最中に……

「あ、キティ。向こうの世界に行ったら、無暗に力は振るわない事な？　めんどくさいことになるから」

「何故だ？　そこらの連中に負ける筈がないのに……」
「向こうの世界では“悪者”ってのは若い者にとっては自分の名を上げる為に良い餌だからな。そこに俺達が行けば……どうなるか、分かるな？」
「なるほど……。私達が行けば、それなりの悪名があるからすぐに喰いついてくると？」
「そういうことだ。出来るだけ相手を威圧させていくような戦い方法を見つけてくれ。俺もそうするからさ」
「分かった」
「さて、着いたな。あとは“ゲート”まで歩くだけか……　ローブを被っとけよ？」
「そういう真紅狼も仮面付けておくんだな」
「ハイハイ」

俺達はそれなりに『悪名』が高い為か、行く先々で戦闘が起きたりしてる。
その為か、変装することで無用な戦闘を避けていた。―――がバレるものはやはりバレる。
しかも、その俺達の異名の名が『魔法世界（ムンドゥス・マギクス）』に流れている可能性があるので、注意を払っていた。
とまぁ、“ゲート”についた時にはちょうどいいタイミングで転移し、だいぶ新しくなったメガロメセンブリナに着いた。
見てみた感想は、なんというか将来の上海みたいだな。

「さて、エヴァ。こちらの拠点に向かうか」
「そんなところあるのか？　紅赤主（変装時の呼び名）」
「あるぜ、普通の人じゃ入れねぇ場所にな」

その後、メガロを出た俺達は少し離れた場所で再びケーツハリーを呼び、ケルベラス大森林に向かった。
ちょうど、城の真上だったのでそこで降りて、ケーツハリーは魔石に戻った。

「ここが俺の城だ」
「ここが真紅狼の城……」
「壁とかは自然が作ったものだから、おいそれとは壊されないし、この奥まで来るのに他の猛獣を避けなきゃならないから、まず人は来ないと思うぞ？　来るとしたら、俺達を討伐しに来たアホ共ぐらいか……」

そんなことを言っていたら……

『その中に居る、“紅蓮の殲滅鬼”に“闇の福音”出て来い！！』

なんてことを言われた。

「真紅狼、早速来たようだぞ？」
「これが“フラグ”ってやつか……チクショウｏｒｚ」
「真紅狼はなにでいく？」
「俺は……この“真紅の執行者（クリムゾン アドミニスター）”で行くか」

右腰のホルスターから銃身は銀でさらに牙を剥いた狼の彫刻が彫ってあり、色は真紅、眼は水晶になっている。
眼の水晶は撃つ弾丸によって色が変わり、彫刻も変わる。
実弾時は口が閉じた狼で眼は黒になり、魔力弾時は牙を剥いた狼で眼は蒼になる。

銃のタイプはリボルバー仕様でこれも実弾と魔力弾ではリロードの仕方が変わる。
実弾時は、空の薬莢を抜くだけで自動的にセットされる。
魔力弾時は、薬莢を抜かなくても、空になった薬莢に撃ちたい魔法を込めれば良いので連射能力がとても高い。

「私は、『暗黒魔法』を放つか」
「威力抑えろよ？」
「分かっている、課題の一つだからな」

俺が教えた魔法は全て詠唱が無い。
その為か、常に全力で放てる状態だとすぐに気を失ってしまうので少ない魔力で放てるように課題を出した。
そして、今も課題に取り組んでいる最中だ。

『さっさと出て来い！　出てこないと大規模魔法を放つぞ！？』

お客さんが痺れを切らしかけているので向かう事にした。

「少し黙れ、バカ」
「全くだ」
「へへっ、俺達に恐れを成して、震えていたと思ったぜ！」

と、まぁバカが吠えてます。
敵はだいたい２，３０人で雰囲気からして『自分たちは強い！』と思い込んでいるバカ共だった。

「やる気しねぇ……が、何度も来られても迷惑だから、追い払うか」
「準備はいいか、紅赤主？」
「いつでも」
「では……『ヘルウィンド』！！」
「！？　全員避けろ！！」

前に居た数人はかろうじて避けることが出来たが、武器が石化していた。
その後の後ろに居た数十名は避けることに失敗し、中途半端な魔法障壁を張っていたので、一瞬で石化するよりも悲惨なことになった。
右または左半分だけ石化された者、下半身が石化した者、首だけ石化した者と酷い状態だった。

エヴァはそのまま『サンダガ』や『ブリザガ』を片っ端から放っていた。
俺もやらないと……

ふむ、『カオスドライブ』装填(セット)！！

ドン！　ドン！　ドォン！

三発の魔力弾が生き残った者達を追撃する。

「そんな弾、簡単に避けてやる！」

男たちは避けて、こちらに向かってきていたが男たちは知らなかった……。
この銃から放たれる弾丸は全て“対象に当たるまでどこまでも追いかける”ことを。
事実、後ろから向こう側にいってしまった弾が戻ってきていた。
そして――――

ダァーーン・・・・

バリバリバリィィィィィ！！

「「「ガァァァァァァァァァァァァ！！！？」」」
「何故、撃たれたか、分からない」って顔だな？」
「……え……ぁ……あ”あ”……」
「コイツから放たれる弾は全て追撃性能があってな、どこまで逃げ

ようが対象に当たらない限り、止まらないんだよ。まぁ、弾自体を消せば、逃げられはするがな」
「真紅狼、コイツ等はどうするんだ？」

コイツ等は先程『カオスドライブ』をふんだんに浴びている為、体が麻痺していた。

「ちょっと離れた場所に放り投げとけ。痺れがとれれば、逃げることが出来るし。出来なかったらこの森にうろついてる猛獣たちに喰われるだけさ」

聞こえるように話すと、男たちは震えだしたが俺はそんなことは知らない。
“真紅の執行者（クリムゾン アドミニスター）”をホルスターに戻して、まだ生き残っている15人を出口に近い森の方に放り投げた。

「さて、バカ共一掃できたし。休むか」
「真紅狼」

俺の名を呼び、「じーー」とこちらを見ていた。
ああ、アレね。

「ん……（ナデナデ）」
「〜〜〜♪」

「……寝ますか」
「うむ！」

そうして、『魔法世界（ムンドゥス・マギクス）』の初日が終わった。

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

どうやら生き残った者が居たらしく、ケルベラス大森林は別名“鬼の棲む森”と魔法世界に広まったらしい。

再び『魔法世界』へ・・・（後書き）

そろそろ、魔法大戦にはいろうかな～～と思ってます。
そして、エヴァは『闇の魔法（マギア エレベア）』を習得。
これは二つの“術式兵装（アルマティオーネ）”があります。

一つは“ネギま”の術式兵装。もう一つは“暗黒魔法”の術式兵装です。
基本的に性能とかは同じですが、追加効果が違うだけです。

そして銃の名前が決まりました。
考えてくれた裂きやん様、ケルベラス様、感謝します！
名は“真紅の執行者（クリムゾン アドミニスター）”です。

お次に性能は読むのはいいけど様が考えてくれました。
少しばかり、いじりましたがほぼ一緒です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7264y/

新　“ ネギまと転生者 ”

2011年11月24日13時52分発行